

令和4年度 卒業論文

論題：スイミングクラブの歴史と今後の展望

担当教員名 平川 幹和子

九州産業大学 商学部

学籍番号：19CB588

氏名：林 太陽

【要約】

水泳とは、老若男女問わずにできる数少ないスポーツであり、気軽に水泳が学べる施設がスイミングクラブである。そのスイミングクラブが抱えている問題の中に、コーチなどの人材不足問題がある。本論文では、スイミングクラブの成り立ちや、どのように広がっていき大きくなっていったかについて調べることで、スイミングクラブができた当初の目的を理解し、なぜスイミングクラブのコーチが不足するのかを明確にした上で、人材不足問題についてとるべき手段について考え、スイミングクラブの利益の確保と人材不足問題の改善案の提案を行った。

(251 文字)

目次

1. はじめに	1
2. 水泳の発展とスイミングクラブの歴史	2
2.1. 水泳の始まりと発展	2
2.2. スイミングクラブの歴史	3
3. スイミングクラブが抱える人材不足問題	6
3.1. 世界に対して日本の実力	6
3.2. 引退後の選手とコーチの関係	7
3.3. スイミングクラブの人材不足	8
4. スイミングクラブの人材不足問題に対する提案	10
4.1. コーチによる新しいコーチの育成	10
4.2. 勤務時間と給料問題	10
5. おわりに	12
参考文献	14

1. はじめに

水泳とは、老若男女問わずにできる数少ないスポーツである。その水泳を一から学ぶことができるのが、スイミングクラブである。1964年に日本で東京オリンピックが開催され、その時のテレビの視聴率は61.4%にもものぼった¹。これまでスポーツに縁遠かった人々までが、全身全霊で勝負に挑む選手の姿に感動し、スポーツの魅力に触れたのである。さらに1年後、スポーツをより身近に感じるようになった人々を、今度は実際にスポーツを行うことに引き込む機会が、訪れた²。中心となったのは、東京オリンピックに参加した役員や選手であった。日本オリンピック委員会のサイトには『「スポーツはエリートをつくるだけが目的ではないのである。みんながスポーツを生活の一部として楽しみ、必要に応じて体力づくりや健康増進に役立てればよい。同時にスポーツを楽しめる環境整備が必要』と考えた人である²と記されている。その行動をした第1号は、水泳のヘッドコーチだった村上勝芳氏が代々木オリンピックプールを会場に始めたスイミングクラブであった。

水泳界隈ではこのような新しい動きに同調する人も多くいた。1964年の東京オリンピックでの水泳の結果を振り返って見てみると、メダルを取ることができた種目は、4×200mリレーのたった一つだった。1960年までは他の種目でもメダルを取ることができていたのに、1964年の東京オリンピックは日本競泳チームにおいて惨敗といえる。その結果、このままではいけないと考えた人たちにより、たくさんのスイミングクラブができていった。しかしながら近年、スイミングクラブだけでなく、フィットネスクラブなどにおいても指導者の人材不足という問題が出てきている。

現在、私はスイミングクラブでアルバイトをしており、私自身の身近ところでも、スイミングクラブ内で人材不足を感じることもある。おそらく、全体ではさらに多くの問題があるだろう。そのため、スイミングクラブの歴史を整理し、今後、利益を出していくためにどのように動いていけば良いのかを探求したいと考えた。ゆえに第2章では、スイミングクラブの歴史について、誕生からどのように大きくなっていったかを調査し、第3章では、スイミングクラブの問題と現在行われている対策を整理していく。第4章では、今後スイミングクラブがどのように行動していけば利益が出やすいのかについて考察を行う。

¹ 読売新聞オンライン東京オリンピックニュース
<https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2020/20210726-OYT1T50143/> (2022-11-8)

² 公益財団法人日本オリンピック委員会
https://www.joc.or.jp/sp/past_games/tokyo1964/story02/index2.html (2022-11-8)

2. 水泳の発展とスイミングクラブの歴史

スイミングクラブの経営を考える時、その成り立ちを知ることでスイミングクラブの社会的な役割が理解できる。そこで本章では、最初に水泳とはどのように始まって発展していったのかを知り、その上でスイミングクラブがどのように誕生し発展していったのかについて述べていく。

2.1. 水泳の始まりと発展

水泳とは全身を使うスポーツである。もともと水泳とは、狩猟や採取のために泳いでいたと考えられている。昔の水泳は今と違って、速さを競うモノではなく生活に必要な手段であった。そんな中、泳ぐことを速さで競うスポーツとして行っていったのが 19 世紀以降のイギリスである。速く泳ぐことを追求したことにより、泳ぐことがスポーツとなっていき、1896 年にあったアテネオリンピックで競技種目として採用された。アテネオリンピックでは平泳ぎしか種目としてはなかった。つまり、平泳ぎが最初の水泳の基本であった。平泳ぎも最初は呼吸動作がなく、顔を常に上げた状態で泳がれていた。

背泳ぎが追加されたのは、1900 年のパリオリンピックである。背泳ぎは元々遭難者の救助などに使われていた。最初の背泳ぎは両手を同時に動かすという泳ぎ方だったが、アメリカのハリー・ヘブナーが交互に腕を回し泳ぐことによりオリンピックで金メダルを獲得し、変わっていった。

クロールが追加されたのは、1904 年のセントルイスオリンピックである。クロールの最初は、イギリスのアーサー・トラジオンによって考案されたトラジオン・ストロークというものが始まりだった。それは左右交互に腕を回していくストロークである。そのため速いスピードで泳ぐことが可能になった。

バタフライが追加されたのは、1956 年にメルボルンオリンピックである。バタフライは、ドイツのエーリッヒ・ラーデマッヒェルがオリンピックで平泳ぎにおいて今のバタフライに近い形の腕の回しで泳いだことにより広まっていった。

さらに、1964 年の東京オリンピックで今まで追加されてきた 4 つの泳ぎを連続して泳ぐという個人メドレーが追加された。個人メドレーでは最初にバタフライを泳ぎ次に背泳ぎを泳ぎ次に平泳ぎを泳ぎ最後にはクロールを泳ぐという順番で泳いでいくものである。個人メドレーの追加で競泳の種目も多くなりさらには、4 人で 1 種目毎に泳ぎ競うというメドレーリレーも追加されていった。メドレーリレーでは個人メドレーの順番とは異なり最初に背泳ぎを泳ぎ次に平泳ぎを泳ぎ次にバタフライを泳ぎ最後にクロールを泳ぐという順番で泳いでいく。なぜ個人メドレーとメドレーリレーでは泳ぐ種目が同じなのに対して

順番が違うのかというと、メドレーリレーでは、次の人が上から飛び込んでスタートをするので、個人メドレーとは違い最初に背泳ぎを泳がないと後から背泳ぎをスタートすることが出来ないのです。個人メドレーとメドレーリレーでは泳ぐ順番が違うのである。

2.2. スイミングクラブの歴史

1964年の東京オリンピックで日本の競泳が惨敗をしたことで、日本水泳界は惨敗の原因として3つあげた。1つ目が指導者不足、2つ目が通年利用可能なプールの不足、3つ目が一貫指導の欠如である。そこで、この原因を解決するためにスイミングクラブの設立を目指したのである。日本で最初のスイミングクラブは、1964年の東京オリンピックで競泳のヘッドコーチであった村上勝芳が1965年に代々木競技場のサブプールにおいて設立したスイミングクラブである。

その後、全国に次々とスイミングクラブが出来ていった中、民間が経営する施設でのスイミングクラブは多摩川スイミングクラブが最初である。多摩川スイミングクラブでは水泳を基本とした統合的な体力作りを目的とした。

ここで1964年に東京オリンピックに出場していた後藤忠治が立ち上がった。笹川スポーツ財団のサイトには「オリンピックに選手として出場し、負けたのは私だ。その私が何もしなくていいのか。いいわけはない」³と記されている。その結果、1969年に体操のスポーツクラブ立ち上げて活動していた小野喬清子夫妻や遠藤幸雄とともに、新たにセントラルスポーツクラブを立ち上げたのである。最初はスポーツを教える場所が無かったため、杉並区の高校の体育館とプールを借りて教えていった。この状況において、後藤忠治はスポーツクラブの理念として「スポーツを通じての体力づくり健康づくり、情操教育を行う。さらに、明るく仲よく元気よく磨けよ心、鍛えよ身体、今日もみんなで頑張ろう」というスポーツ訓を作った。

このように日本では1965年からスイミングクラブが続々と出来ていったが、欧米では日本よりも早くの1950年代になると温水プールが普及していき、夏以外でも泳げる状態となっていた。しかし日本では、温水プールは1958年にアジア大会のために作られたという千駄ヶ谷の屋内プールしかなかった。そのため、競泳は千駄ヶ谷の屋内プールで練習をするか、冬は練習をしないことが当たり前だった。ゆえに他国との差が広がった。

このように、スイミングクラブが増えていき、水泳をする人が増えた。図表1に歴代の

³ 笹川スポーツ財団東京オリンピックの「負のレガシー」をチャンスに
https://www.ssf.or.jp/ssf_eyes/history/olympic_legacy/05.html (2022-12-03)

オリンピックでの金メダル取得者を示す。これを見ると、幼少の頃から水泳を学んでいくことが大切だということがわかる。

図表 1 1964 年以降の歴代のオリンピックでの金メダル取得者

年度	大会	選手名	所属スイミングクラブ
1972	ミュンヘン	田口信教	広島ドルフィンクラブ
		青木まゆみ	山田スイミングクラブ
1988	ソウル	鈴木大地	セントラルスポーツクラブ
1992	バルセロナ	岩崎恭子	沼津スイミングクラブ
2004	アテネ	北島康介	東京スイミングセンター
		柴田亜衣	鹿屋体育大学 水泳部
2008	北京	北島康介	日本コカ・コーラ (東京)
2016	リオデジャネイロ	萩野公介	みゆきがはらスイミングスクール
		金藤理絵	加藤健志氏のもとで練習
2021	東京	大橋悠依	イトマンスイミングスクール

1964 年以降にオリンピックで金メダルと獲得した選手は、1972 年のミュンヘンオリンピックでは広島ドルフィンクラブに所属していた田口信教と山田スイミングクラブに所属していた青木まゆみで、1988 年のソウルオリンピックではセントラルスポーツクラブ所属の鈴木大地だけであった。1992 年のバルセロナオリンピックで 14 歳にして金メダルを獲得した岩崎恭子は沼津スイミングクラブに所属していた。2004 年のアテネオリンピックでは東京スイミングセンター所属の北島康介と鹿屋体育大学の水泳部所属の柴田亜衣が金メダルを獲得し、2008 年の北京オリンピックでは日本コカ・コーラ (東京) 所属の北島康介が連続で金メダルを獲得した。2016 年のリオデジャネイロオリンピックではみゆきがはらスイミングスクール所属の萩野公介と加藤健志のもとで練習していた金藤理絵、2021 年の東京オリンピックではイトマンスイミングスクール所属の大橋悠依が金メダルを獲得した。

このようにオリンピックでの歴代金メダル獲得者は全てスイミングクラブに所属しており、小さい頃から練習を積んでいる。オリンピックでは金メダルだけでなく、銀メダルや銅メダルなどもたくさんの方が獲得することが出来ている。これは1965年にスイミングクラブを設立した結果だといえる。

しかしながら、社会変化や人口減少など、昔と違う状況がスイミングクラブの存在に影響を落としてつつある。次章では、スイミングクラブを取り巻く問題について言及する。

3. スイミングクラブが抱える人材不足問題

3.1. 世界に対して日本の実力

一つ目の問題として、世界と日本の速度の差が広がってきているということである。図表 2 に長水路⁴男子の日本記録と世界記録のタイムを示す。

図表 2 現在の日本記録と世界記録の違い（長水路男子）

種目	日本記録	世界記録	タイムの差
50m自由形	21 秒 67	20 秒 91	0 秒 76
100m自由形	47 秒 87	46 秒 86	1 秒 01
200m自由形	1 分 44 秒 65	1 分 42 秒 00	2 秒 65
400m自由形	3 分 43 秒 90	3 分 40 秒 07	3 秒 83
800m自由形	7 分 49 秒 55	7 分 32 秒 12	17 秒 43
1500m自由形	14 分 54 秒 80	14 分 31 秒 02	23 秒 78
50m平泳ぎ	26 秒 94	25 秒 95	0 秒 99
100m平泳ぎ	58 秒 78	56 秒 88	1 秒 90
200m平泳ぎ	2 分 06 秒 40	2 分 06 秒 12	0 秒 28
50m背泳ぎ	24 秒 24	23 秒 71	0 秒 53
100m背泳ぎ	52 秒 78	51 秒 60	1 秒 18
200m背泳ぎ	1 分 52 秒 51	1 分 51 秒 92	0 秒 59
50mバタフライ	23 秒 17	22 秒 27	0 秒 90
100mバタフライ	50 秒 81	49 秒 45	1 秒 36
200mバタフライ	1 分 52 秒 53	1 分 50 秒 00	2 秒 53
200m個人メドレー	1 分 55 秒 07	1 分 54 秒 00	1 秒 07
400m個人メドレー	4 分 06 秒 05	4 分 03 秒 84	2 秒 19
4×100mフリーリレー	3 分 12 秒 54	3 分 08 秒 24	4 秒 20
4×200mフリーリレー	7 分 02 秒 26	6 分 58 秒 55	3 秒 71
4×100mメドレーリレー	3 分 29 秒 91	3 分 26 秒 78	3 秒 13

⁴ 競泳で使用されるプールには、「長水路」と呼ばれるプールと「短水路」と呼ばれるプールの 2 種類がある。長水路とは縦方向の長さが 50m のものであり、短水路は 25m のものである。

これを見ると、日本と世界でどれだけタイムに違いがあるのかがわかる。長水路での 200 m 平泳ぎの日本記録を出しているのは佐藤翔馬である。彼は世界記録まで後 0 秒 28 とせまってきている。実際に 2008 年には北島康介が 100m 平泳ぎで、2012 年には山口観弘が 200m 平泳ぎで、2017 年には渡辺一平が 200m 平泳ぎで、世界新記録を出している。平泳ぎでは世界レベルでのタイムであるが、自由形や他の種目ではあまり世界記録を出せておらず、日本記録と世界記録の差も大きい。

短水路において世界新記録を出している日本人選手はいるが、2022 年現在では長水路において世界新記録を持っている選手がいない。短水路と長水路の泳ぎの差としては 50m 自由形で考えると、長水路では男子で 21 秒 67 であるが、短水路においては 20 秒 95 というタイムでその差にして 0 秒 72 という差がある。同じ種目でも長水路と短水路ではここまでタイムが変わってくる。違いとしてターン動作が関係してくると考えられる。短水路では、50m 泳ぐのにターンをするので壁をけることで泳ぐよりもスピードが出る状態で後半に臨むことが出来る。さらに壁をけることでトップスピードでの泳ぐ時間が増えるためここまでタイムが違ってくるのである。

オリンピックなどの大きな大会では長水路でのレースになることが多くあるため、長水路の大会でしっかりと速いタイムを出していく必要がある。

3.2. 引退後の選手とコーチの関係

オリンピック選手を育成するために、現在、スポーツアナリストがデータと理論とデジタル映像などを使いサポートする体制をとっている。サポートには生理学的側面のサポートとバイオメカニクスの動きのサポートがある。

生理学的側面のサポートでは、練習後や大会のレース後の脈拍数を測ったり、行動観察や心理検査などをしてその人にあった練習の内容やトレーニング内容などを決めたりするサポートである。

それに対してバイオメカニクスの動きのサポートは、実際の泳ぎに関してどのようにしていけば良いかについてアドバイスをしたりするサポートである。これには、元競泳選手であった人が実際に泳ぎを教えるなどといった事もある。平泳ぎで世界記録を 5 年間保持していた山口観弘は、今ではコーチとなり泳ぎを教えている。水泳は十人十色で人によって泳ぎ方が多少違うため、世界記録保持者だった人が 1 対 1 で泳ぎを見ていき、その人にあった泳ぎを教えてくれることはとても魅力的なことである。これにより、泳ぎのフォーム改善や正しいトレーニングなどをして実際にタイムが伸びていくだろう。細かいところ

を指導し納得してもらうには今までの実績や経験がないと出来てはいかないため、山田コーチのように実績を持った人や、競泳を何年もやってきた人などが今後のコーチとして1人1人のフォーム改善をしていけば、今後、世界記録にもつながっていけると考えられる。

3.3. スイミングクラブの人材不足

現在、子供の習い事の中で水泳を習わせることは人気が高い。アクトインディ株式会社が企画運営する国内最大級の子どもとお出かけ情報サイト「いこーよ」が、2020年2月3日から2020年3月2日に小学生以下の子どもを持つ全国の保護者873名を対象に行った「習い事に関するアンケート」⁵では、習い事の人気No.1は水泳であると結果が出ている。その理由としては、水泳では体力がつくことが挙げられ、喘息を持っている子供が水泳を始めることも多いとしている。また、学校の授業だけでは泳げるようにはならないためスイミングクラブで泳げるようにしてもらうなどといった理由も挙げられる。

このような人気によってスイミングクラブは、1965年以降増加し、2015年の時点で5419カ所ある。ところが、それだけのスイミングクラブがある中で、公益財団法人日本水泳連盟のデータによると、競泳人口はおよそ20万人もいる。それに対して日本スポーツ協会公認スポーツ指導者登録状況によると競泳指導者は3,160という結果が出ている⁶。全ての競泳コーチが登録しているわけではないだろうがこの数字を見ると指導する人材が足りないのがよくわかる。スイミングクラブの経営を続けるためには、水泳の指導者確保が必要である。人材が不足すれば、スイミングクラブに泳ぎを習いたいと子供がきても入会を断ることになってしまう。そうなれば、スイミングクラブの経営に支障が出る。

3.2で述べたように、世界記録保持者でなくてもスイミングクラブに所属していた選手が引退後にコーチになるという場合はある。どうすれば泳げるようになるのか、どうすれば速くなるのかを知っている元選手であればコーチとして適任といえる。子供に教えるときには実際に泳ぎを近くで見せることで、どのように体を動かせば泳げるようになるのか説明したり、子供にここが違うというのをやって見せ、直させたりと、選手として泳いできた人たちならではの教え方がある。

また、スイミングクラブ内のコーチ同士で情報交換を行えば、子供に教えていくための

⁵ PR TIMES 【2020年習い事調査】水泳が1位であり続ける理由
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000191.000026954.htm> (2022-12-11)

⁶ JSPO スポーツ指導者に関するデータ
<https://www.japan-sports.or.jp/coach/tabid248.html> (2022-12-12)

知識を共有することでコーチの数も増やすことが可能であろう。

しかしながら、スイミングクラブのコーチの年収を見ていくと平均で 350 万円前後だと言われている。最大年収と言われている 50 代で 430 万円前後だという。50 代の平均年収が 613 万円と言われている中で、この数字は 200 万円近く低い。

さらに、専門的な事を 1 人 1 人に教えてその給料で水に入って教えるときもあれば、着替えて別の仕事をすることがある。このように勤務時間は他の職業と変わらないが水に入る、着替えて別のことをするなどといったように体力がいる仕事である。

このように、スイミングクラブのコーチは、仕事の多さと収入の低さからなり手が少ない現状である。上部で述べたように、コーチの数が少ないと受け入れる生徒数が減り、スイミングクラブの収入が減る。これは負のスパイラルともいえる。スイミングクラブが長く続いていくためには、この負のスパイラルからどう脱却するかが鍵である。

4. スイミングクラブの人材不足問題に対する提案

4.1. コーチによる新しいコーチの育成

まずは、スイミングクラブの数に対してコーチの人材不足となっているので、普段は昼間や夕方に子供に対して泳ぎを教えていたりしているけれど、それとはまた別の時間でコーチが少しでも泳げてコーチをやってみたいと思っている人や泳げなくても子供に教えてみたいと思っている人に対して、どのように子供に教えていけばよいかについての練習をしたり、その人たち自身の泳力を上げていくということをしていたり、泳ぎのフォームについて説明し、それを自分で実際にやってみるなどして水泳についての知識を学んだ後に、実際に子供に泳ぎを教えていけば良いと思うし教える時にも最初は慣れていないだろうから子供に泳ぎ方やフォームを教えてくれたコーチと一緒に入り、新しいコーチのやり方を見て反省点や今後の課題などを練習が終わった後に話し合ったりしてどんどん一人でやっていけるようにすれば、最初は大変だろうけど、長い時間で見るとコーチの数が増えるので人材不足にも対応できていけると考えられる。それにコーチが別の時間を使い新しくコーチの育成をしていけばその分の給料なども出ると思うのでスイミングクラブでのコーチの年間給料も増えていくと考えられる。

4.2. 勤務時間と給料問題

3.3 で述べたように、スイミングクラブのコーチの年収はだいたい平均で 350 万円前後だと言われ、日本の平均年収と比べても決して多いわけではない。そのせいで、水泳の知識がある人や競泳で選手経験がある人などがスイミングクラブのコーチになることが少なく、コーチの人材不足にもつながっている。

実際に選手として泳いでいた元競泳選手の人たちだと、水泳の知識もあり子供にしっかりとした指導をしていくことができるがそうするためには、幼少の頃から水泳を学ぶ必要がある。幼少から水泳を学ぶためには月にだいたい 4000 円から 6000 円ほどの月謝がかかる。さらに上のクラスである選手コースともなれば 10000 円ほどの月謝がだいたいかかる。年間でいうと、普通のクラスだけで 48000 円から 72000 円前後ぐらいであり、選手コースで言うと 120000 円ほどかかるのである。それを、5 歳から高校生の終わりである 18 歳まで続ける中で、9 歳から選手コースに上がったとして計算をしていくと全体で 1280000 円という大金になる。ここまでの支払いをして学んできた知識を持った競泳選手としてのレベルが高い人がコーチになるとしたときのスイミングクラブの年収が少ないと考えられる。ここまでの経験、知識を使っていても、子供に細かいところまで教えていき、泳ぎを直すということは難しい。その上、選手コースともなれば速いタイムをだすことのできる選

手を育てることはとても大変である。したがって、幼少から水泳を学んでおり選手コースの経験がある人の知識を無駄にするのではなく有効にするためにはスイミングクラブがたくさん知識を持った元競泳選手に対して少しでも多く給料を支払い出すということができれば、別の職業に就く前にスイミングクラブのコーチでならこれだけのお金がもらえるならここで働いていこうと考える人が確実に増えて人材不足問題にも対応する事が出来ると考える。

収入面の改善が行われれば、元競泳選手やフォームに関しての知識をしっかりと持っている人がコーチになればそこから新しい選手の育成もして行くことが出来ると考える。大会での経験や実際の体験談などを聞くということも大事である。それらは元競泳選手でなければ出来ないことなのでそういった人に対しての給料をしっかりと支払うということをさらにすれば今後のスイミングクラブでの選手のレベルもどんどん上がっていくと考える。そうすればスイミングクラブの評判がよくなり入会者の人数が増え、会社としての利益を出していけると思うのでスイミングクラブのコーチにはしっかりと給料を支払うことでスイミングクラブがよりよい形になっていくと考える。

それに年収が350万円前後であり、それに対しての勤務時間が夜遅くの場合もある。スイミングクラブとは子供だけでなく、別の時間に大人の泳げない人やもう少し泳げるようになりたい人などもくる。そうすると昼間などにする事が出来ず夜になってしまう。その分朝が少しゆっくり出来るかもしれないが、夜が遅くなりその上でそこまで給料が高くないとすれば当然スイミングクラブでコーチをしようと思う人は減っていくので大人に教え夜が遅くなる場合には、それなりの手当をつけるなどしてコーチたちが不快に思うことなく働けるようにしていけばスイミングクラブのコーチの人材不足も減っていくと考えられる。

5. おわりに

本論文ではスイミングクラブについての歴史から今後の展望についての提案をしていった。第2章では水泳がどのようにスポーツとして発展していったかについてと、スイミングクラブの歴史についての考察をした。スイミングクラブがどのような理由で創られて、発展していったのかについて、創られてからの末井の活躍、スイミングクラブが出来た事での出来る前との違いや成長していった選手についてまとめている。

第3章ではスイミングクラブが抱えている問題についてまとめた。スイミングクラブの最初は水泳のレベルを上げるためにつくられどんどん増えていったが、世界との差がまだまだあると言うことを整理していった。日本と世界の競泳選手ではトップスピードの差があり、長水路で良い結果を出すことが出来ていない。それをサポートするために、生理学的側面のサポートとバイオメカニクス的な動きのサポートが行われている。そのサポートによって練習内容を決めていたり、トレーニング内容を決めたりしている。スイミングクラブの問題として一番重要なのは人材不足である。スイミングクラブは習い事のアンケートで人気 No.1 であったことから、水泳が小学生などから人気である。しかしその水泳を教えていくコーチの数が足りないとなると、水泳をスイミングクラブで習いたいと思っても、コーチの数が足りないから習うことが出来ないということにもつながってしまう。しかしコーチの年収を見ていくと、そこまで多くはない。専門的な知識が必要でありながら給料が少ないと人材不足にもつながる。

第4章では第3章であきらかになった人材不足をどうすれば減っていくかについて提案していったのである。コーチによる新しいコーチの育成が必要であると考えそれによってコーチの数を増やし、既存のコーチの給料を少しでも上げていけるように考えた。他にも、専門的な知識だけでなく、元競泳選手だと、実際に正しいフォームを見せて教えるなど様々なことが出来るので、それに対して、スイミングクラブはそのコーチに対してしっかりと給料を支払うなどすればスイミングクラブの評判も上がっていき結果としてスイミングクラブの利益にもつながっていくと考えた。

水泳とは、老若男女問わずにできる数少ないスポーツであり、気軽に水泳が学べる施設がスイミングクラブである。スイミングクラブの今後の展望として、人材不足に対してしっかりと行動していかなければいけない。そのためには現在選手で泳いでいる人たちに声をかける、若手のコーチの育成などをしっかりとしていけばスイミングクラブは長く続いていけると考える。選手がコーチになりさらに大会で結果を残せば、スイミングクラブの

評判が良くなっていき、入会者が増えスイミングクラブの利益にもなる。利益が増えるとコーチたちの給料についても改めることが出来ると考える。さらに、速いタイムの選手が増えるということは、今後日本人で新たに長水路での世界新記録を出していけるような海外選手とのトップスピードの差を埋められる日本人選手が現れて日本人が長水路で世界新記録をだせる日がくると考える。

参考文献

- Results of Japan Swimming 全国ランキング <https://result.swim.or.jp/> (参照 2022-12-07)
- 公益財団法人日本水泳連盟 競泳記録更新履歴 <https://swim.or.jp/swim/> (参照 2022-12-10)
- マイナビ BOOKS 競泳・日本代表を下支えするスパイスとしての「泳ぎ」の分析
https://book.mynavi.jp/macfan/detail_summary/id=64589 (2022-12-11)
- Dream Coaching by Q テレ その人に合ったレッスンを
<https://www.dream-coaching.com/coach/W4ADp3dvVl> (2022-12-11)
- 働く毎日が、いい日に。dada
<https://doda.jp/guide/heikin/age/#::~text=> (2022-12-13)

(10,274 文字)